星野幸弘

RISKYNA

機動戦士ガンダム サイド アナライズ ストーリー**VOL1**

1. プロローグ

　宇宙世紀００７９。
　この年、僕たちのジオン公国は地球連邦に独立戦争を挑んでいた。
　ミノフスキー粒子という、レーダーを無効にしてしまう物質が
発見されて、　それを互いの国同士が戦場で大量に巻き散らすため、
レーダーの広範囲索敵《こうはんいさくてき》が不可能になり、
レーダーとコンピューターを連動させて兵器の命中率をあげることも
できなくなり、戦闘は人間の目や耳に頼るしかなくなってしまった。
　そんな中、僕たちジオン軍は長年研究してきた隠し球の新兵器を
投入して、地球連邦軍を恐怖のどん底につき落としていた。
　隠し球の新兵器は一つ目の鉄の巨人、モビルスーツ〈ザク〉という。
　　投入開始から数日を待たずに、この全長十七・五メートルの
巨大人型決戦兵器〈ザク〉は三十対一という国力差を覆す、
絶大な戦果をあげ始めた。
　なにしろ、連邦の小回りが効かない鈍重で隙だらけな宇宙戦艦
マゼランや宇宙巡洋艦サラミスなどはザクに持たせたバズーカの
砲弾を艦橋かエンジンに、ちょいと一発撃ち込んでやれば、宇宙空間
では即致命傷になり、あっという間に沈めることができるし、やつらが
頼みの綱にしている固定銃座をかいくぐるなどザクの機体のあちこちに
取り付けてあるスラスター（推進器）を使った高機動力を使えば
造作もないことだ。
　モビルスーツの開発が進んでない地球連邦軍は宇宙戦闘機
〈セイバーフィッシュ〉を何十機と使い、ザクの迎撃をしたけれど、
ザクとは装甲厚もスラスターのパワーもまるで比べものにならない。
　ザク専用マシンガンの銃撃で、文字通りカトンボのように
一瞬で撃ち落とせた。
　　だてに人型をしているわけじゃない。
　　人間に似せて作られたザクの厚い装甲に包まれた腕は、
ザクの大きさに合わせて作られた巨大なマシンガンや斧を
人間以上に器用に扱ってみせるのだ。
　ジオン軍が作り上げた、この一つ目の鉄の巨人の登場は、
宇宙において「ジオンに敵なし」の状況を作りだし、その余勢を

２．サイド７ 実地回収作業録

駆ってザクを使った地球圏降下作戦により、連邦軍の戦闘拠点を
虱潰しに潰していき地球圏の掌握もかなりのところまで進んだ。
　ジオンに対し、三十倍の圧倒的な資源・人口を誇る地球連邦
だったが、一つ目の鉄の巨人の出現により実質的な戦況は
ほぼ五分までジオンの優勢になっていた。
　そう、あの白いモビルスーツと白い補給艦（苦笑）を
シャア少佐たちが発見するまでは……

２．サイド７ 実地回収作業録
　宇宙世紀００７９　９月 １８日 未明
　戦争の裏方である僕たち隠密部隊〈決戦兵器開発部・回収分析班〉は
その日、宇宙空間に染み入るような漆黒の塗装がされたムサイ軽巡洋艦に
搭乗して、民間人居住用スペースコロニー〈サイド７〉へ最大戦速で
急行していた。
　この回収分析班専用ムサイ〈ハーミット〉は、高速戦艦ザンジバルの
エンジンを横流しして元からあるエンジンに更に無理矢理追加して
取り付けたキワモノで、非公式だがジオン・連邦合わせても移動スピードで
右に出る艦艇はいない最速の船だ。
　ただし、主力武装の主砲三門を全て外し、空いたスペースに目くらまし用
の巨大投光器や残骸回収アンカーなどの特殊装備を取り付けているので、
牽制用のミサイルぐらいしか武装がなく、万が一戦闘に巻き込まれそうに
なったらエリマキトカゲのごとく戦場から全力で逃げだすしかないのが
悲しいところだ。
　そんなスピードに特化した高速艇を使っても〈サイド７〉に到着した
時には、すでに事態は終了したあとだった。
　連邦軍がＶ作戦と名付けたザクに対抗できる新型モビルスーツの
開発をこのスペースコロニー〈サイド７〉で極秘に行っているという情報を
つかんだジオンのエース、シャア少佐が事態を確認するため偵察に向かった。
　ところが情報収集が最優先の偵察のはずなのに、ヘマをやらかして戦闘が
起きてしまい、機密の漏れるのを恐れた連邦軍は、新型モビルスーツの
貴重な部品をほとんど高性能ナパームで焼き溶かしてしまった。

　時すでに遅し!!　なんという失点!!
　ムサイからサイド７に上陸したのはいいが、あまりの現場の惨状に
思わず、回収分析班一同、声も出ず立ち尽くしてしまった。
　放棄されて無人のサイド７の静けさが余計に際立つ。
（※この件に関しては、白いモビルスーツのパイロットが使用不能に
なると装備品のシールドやメガ粒子砲ライフルをポイポイ捨ててくれる
おかげで、のちに我々回収分析班は失点を挽回することができた。
会ったこともないパイロットを悪く言うのもなんだけど、ガンダムのパイロットは
凄腕だが、未熟というか粗忽者《そこつもの》だというのが分析班全員の
統一見解だ（笑））
　これからの作業の難航が目に浮かび、がっくりと肩を落とした僕に、
「ナガイ!!　なんなのよ、このザマは!?　あのシャアの馬鹿、なんて
真似してくれるのよ!! 部下の監督不行届きよ!!　貴重な分析サンプルが
黒焦げでメッチャクチャじゃない!!　うちらのザクも鹵獲《ろかく》されて、
こんなパチもん作られちゃってるのよ、無傷で鹵獲し返すぐらいしないで
どーすんのよ。シャアのクソガキ、後で呼び出してとっちめてやるから!!」
　一気にまくし立てて、やつあたりで人の肩や頭をポカポカどついてくるのは、
ハルカ・ソーテルヌ少将だ。

　二十四歳の若さで少将という、ジオンの支配者一族であるザビ家の者以外で、
例外的に少将の地位にまで昇り詰めることができた、ただ一人の女性。
　そのやんちゃな性格さえなければ喜んで部下に迎え入れたいと
ギレン大将（総帥《そうすい》）に言わしめた人だ。
　現在は部下の採用には比較的寛容で面白みのある者を好むドズル・ザビ
中将の配下にいる。
　軍位としてはドズル・ザビ中将の姉君であるキシリア・ザビ様と少将で、
同格なのだけど、ジオン公国ではザビ家と同格の者は事実上存在しない。

　ソーテルヌ少将の桁外れな天才的才能と、役職柄表だてないが、
輝かしい戦歴を積み重ねてきた、その実力の凄さは長い間
付き合ってきた僕たちも敬服している。
　フレンドリーで陽気なロングヘアーのメガネっ娘（口が滑ってオバさん
などと言おうものなら飯抜き半殺しだが（笑））、その上美人で力持ち、
じゃじゃ馬なのが玉にキズ。
　いくら才能があっても上層部に近づくほど規律が厳しいジオン軍の中で
よくこんな人が政治的に生き延びられたと不思議なところもあるが運もいいんだろう。
「現在の我々の非破壊検査能力や分析技術なら、この黒焦げの残骸や
宇宙空間に流失した破片や部品からでも使用材質やどの程度の戦力を持つ
機体なのか割り出すことはなんとか可能です。怒りを沈めて下さい
ソーテルヌ少将、どうどう！」
「うぅ〜〜っ、し、しょうがないわね、じゃあ〈ハーミット〉に引っ込んで
頭冷やしてくるからあとお願いね、イチロー中佐」
　ひどい現場の有様を見て、ショックでズレ落ちた丸メガネをひきあげて
ソーテルヌ少将はすごすご立ち去っていった。
「やれやれ、しかしほんとハデに散らかしてくれたよな。なんとか
緊急隔壁で気密保ってるけど地面に大穴開けちゃってるし、資材はかなり
宇宙空間に吸い込まれて散らばってるし、こりゃあ中より外の
回収作業の方がいろいろ見つかるかもなあ。骨折れるぞ。ったく」
「イチロー中佐、急ぎましょう。連邦の艦艇が事後調査に訪れる前に
速やかに撤収させませんと」
「そうだなフルヤ伍長。おい、みんな悪いけど馬力かけて大急ぎで
回収分析頼む!!」
「了解!!」
「全く、敵もクソなら、シャア少佐もクソ野郎だぜ、ったく……!!」
「おいおい、うちの少将ならいいがそんな暴言、少佐に知られたら
営倉行きだぞ」
　ぶつくさ文句を言いながらも仲間達の回収作業の手際は猛烈に早い。
　さすがみんな歴戦のプロだ。

　鹵獲、回収、分析、開発……
　僕たちは戦わない。
　手を汚さない。
　けれど確実に戦争をしている。
　やはり手を汚している。
　人を殺している。

　呼吸する空気にまで税をかけて、僕たちスペースノイドを長年
虐げてきた地球連邦から独立するための、これは名誉ある聖戦なのだと
上官たちは言うけれど、そんなことは社会の上級クラスの人間たちの
欲望の小競り合いに僕たち下層民衆を利用しているだけだと知っている。
　利用されたその先に、明るい未来なんておそらくないだろうことも。
　けれど、それでも生き延びたい。
　こんな馬鹿な戦争を一日も早く終わらせたい。
　それにつながることを祈って、たとえ道のりが遠くても少しでも
　今できることに僕たちは全力を尽くすんだ……。

　第二話予告
　ルナツー寄港後、地球に進路をとるシャアと〈木馬〉。
　その後を追う前に士気を高めるためソーテルヌ少将は
　各地に散らばる三百名の回収分析班をソロモンに非常招集する。
　危険な大気圏での追跡を断念したソーテルヌはルナツーの
　開発基地でザク後継機を視察するが、噴出する問題に頭を痛める。
　その様子をみかねたミラン・アギ操舵長は自分の姪を紹介するのだった。
　次回、「ゲルググプロジェクト」
　きみは回収の果てに何を見るか?!

第二話 ゲルググプロジェクト

１．回収分析班非常招集

　子供の頃見ていたアニメで、神出鬼没な天下の大泥棒を追っている警部が大泥棒の居場所を知るには大泥棒のガールフレンドをマークしていればいいと叫んでいる場面をよく見たことがある。

　それに習うかのように、僕たち〈決戦兵器開発部・回収分析班〉は漆黒のステルス塗装がされたムサイ軽巡洋艦〈ハーミット〉で、つかず離れずシャア少佐の動向をマークして後追いをしている。

　地球連邦軍の最新型高性能モビルスーツ〈ガンダム〉と、我がジオン軍のエース、シャア少佐の衝突により産まれるデータは、回収分析班の究極の目的である主力モビルスーツザク後継機の開発を達成する為には喉から手が出るほど貴重な宝物だからだ。

　サイド７の回収作業終了後、“シャア少佐、連邦軍の新型モビルスーツと交戦。コードネーム〈木馬〉追跡開始 ”の報を耳にするなりソーテルヌ少将は〈ソロモン〉と呼ばれるジオン公国の最前線宇宙要塞の巨影が浮かぶ宙域へ、各地に点在する総勢三百名の回収分析班を非常招集した。

　ハーミット一番艦から五番艦までが一斉に勢揃いしたその光景は、ちょっとした勇ましい艦隊の装《よそお》いだ。

　けれど副官の僕、イチロー・ナガイ中佐の見たところ、仮に五隻まとめて木馬にぶつかったとしても、ソーテルヌ少将の指揮がなければあっという間に全滅するだろうと予想する。

　逃げ足の速いことぐらいしか能がない船に、開発分析専門の人員が過半数を占める戦闘素人集団が搭乗しているだけの部隊が今日まで生き残れたのは、モビルスーツ開発と戦闘の天才ハルカ・ソーテルヌ少将のおかげだ。

　「戦いこそ至高」の猛将ドズル中将の元で「戦ったら負け」の弱小部隊が重宝されるという異常事態を際どいバランスで乗り切っているのがソーテルヌ少将の非凡さだと思う。

　非常招集した五隻のハーミットに向かって、ソーテルヌ少将は
艦橋に設置された巨大モニター越しに回収分析班全員に今後の方針を
指示する。
「シャアは鼻が効くから、後をつけていれば必ずガンダムに
出くわすわ。それに巻き込まれないよう、私たちはすんごい遠〜〜くから
その様子を生暖かく見守るの。でコトが済んだら現場に直行!!
ペンペン草も生えないくらいデータ採取したら全速力で退散するのよ!!
　開発部門は今までどおり私たちが送るデータを元に一刻も早く
ザク後継機の開発をしてちょうだい。いい?!」
「まさしくハイ……」
「ハイエナ部隊とかハゲタカ部隊とかぬかした奴はあとで呼び出して、
ボコ殴りにするからそのつもりで(*^o^*)」
　一部の口軽なおっちょこちょい達がソーテルヌ少将にギロリと
睨みつけられ、急いで口をふさぐ。
　ごほん、と咳をしてモニター画面を切り替えながら分析班メンバー
の一人一人を優しく見つめながらスピーチを続ける。
「というわけでこれから戦況はますます厳しくなってきて何が起こるか
判らないけど、とりあえず半年でいい。各自持ち場で全力を尽くして
なんとか生き延びてちょうだい。生きていれば道が開けてくることも
あるから。それで半年経ったらこの顔ぶれでまた会いましょう!!
　みんな判った?!」

「了解!!」
「了解!!」
「了解!!」
「了解!!」
「了解!!」

　五隻のハーミットのメンバー全員が一斉にソーテルヌ少将に敬礼をする。
　ブルネット（黒みがかった茶色の髪の毛）のロングに、丸メガネの愛嬌がある顔に
満面の笑みを浮かべ、ソーテルヌ少将も全員に向かって敬礼する。
「それじゃあ、よく理解できた者から順次解散!!」
　ソーテルヌ少将が搭乗する旗艦ハーミット一番艦を除いた四隻が
一斉に持ち場へと帰投する。

「ふふっ。おふざけの過ぎるところもありましたが、あなたらしい
他の部隊では聴けないスピーチでしたな。ですが、あなたはジオンの上級軍人に
しては優しすぎる。わしらのドズル閣下もそうだが善人はあまり長生きできない。
今のご時勢は特にな。老いも若きも無差別だ。それが少々心配だ……」
　ソーテルヌ少将と僕が赴任する前まで回収分析班の総指揮をしていた
ベテランの老軍人、フルカワ少佐が目をつむり感想を述べた。
「そうね、ホントにそう……。善人は長生きできない。でも安心してフルカワ少佐。
私はあなたが心配してくれるほど善人じゃない。善人じゃないから今生きてる。少将なんか
やってる。善人じゃないからせめて罪滅ぼしにザク後継機の開発に血道を上げてる……」
　微笑んではいるが、さっきの表情とは違い、滅多に見せない暗く悲しい影が浮かんでいる。
「ソーテルヌ少将、あなたの戦績は地球連邦から見れば確かに極悪人かもしれないが、
ジオンから見れば僕が知る限りあなたが関わった戦いでは一人の犠牲者も
出していないはずだ。連邦軍の軍人たちに罪を感じて自分を善人じゃないと
言ってるんですか？」
「ちがうのナガイ。連邦軍の軍人たちからみれば確かに私は極悪人だけど、ジオンの
人間に対しても私は罪を犯してる。善人じゃないの」
「ジオンの人間にも……?!　どんな作戦（ミッション）でそんな罪を?!」
「いつか話すわ……」
　ソーテルヌ少将をじっと見つめる。
「わかりました。これ以上の詮索はいたしません。それでは我々一番艦の部下達も少将の
指示を待っていますので次のご命令を」
　少し落ちこんでいたようだったけど、僕の呼びかけで気持ちの切替ができたのか、
少将はニッと笑った。

「はいはい、わかりました、指示を出しますよ！　えーーっと、じゃあ次の目的地は
ルナツー・地球方面に進路をとって。最大戦速で！」
「ルナツー・地球方面?!　早速シャア少佐の後追いですか？　シャア少佐から各部隊への
報告では木馬はルナツーで補給後、地球に進路をとる模様とのことですが」
「木馬の奴、地球の総司令部ジャブローになんとしてもガンダムをもち帰りたいみたいね」

「地球降下となると当然大気圏突入が問題になります。常識的に考えて木馬は
大気圏突入エリアから離れた艦艇待機区域にて停船後、内蔵されているはずの
大気圏突入カプセルにガンダムを搭載、射出して連邦軍の別働隊が
地上でカプセル回収後ジャブローに向かう……というミツションになるはずですが」
「それにしてもナガイ、素朴な疑問なんだけどさ、大気圏突入カプセルのような
大物を木馬とあだ名されるほど馬そっくりの船に積むことができるのかな?!
　前足部分はモビルスーツや予備パーツの収納でいっぱいだと思うんだけど」
「地球の強大な引力に加えて大気との衝撃と摩擦熱。ガンダムにしろ木馬にしろ、
絶対に大気圏を突破できるはずがありません。艦内に内蔵しているはずの超小型
大気圏突入カプセルを使う気だと思います」
「まあ普通そうするよね。大気圏なんかザクやムサイだって耐えられないもん。
うーん、大気圏突入かーー。やだなーー。怖いなーー。でもシャアの馬鹿、
そういうヤバイ時に限って何かやらかしそうだしなぁーー」
「ただでも危険な大気圏なのに、彼の巻き添えをくらって我々が無駄死にするのだけは
ごめんです」
「そだね。じゃあ私たちはとりあえずルナツー方面のモビルスーツ開発基地に寄って
進行状況の視察をしてから生《なま》ガンダムをチラっと遠くから拝ませてもらって、
ほとぼりが冷めた頃合いに地球へ降下するってことでどうかな？」
「結構です。ではポイント ＸＸＸ－０－Ｌ１２に向かいます。ミラン・アギ操舵長、
ポイント ＸＸＸ－０－Ｌ１２に進路を取れ」
「了解。ミラン・アギ操舵長ポイント ＸＸＸ－０－Ｌ１２に進路を取ります！」
　こうして回収分析班はソロモンから全速でルナツーのポイント ＸＸＸ－０－Ｌ１２に
向かった。

２．ゲルググプロジェクト

ルナツー。

そこは月の周辺にある小惑星帯の名称で、鉄やチタンを初め、様々な鉱石を含んだ隕石や小惑星が浮かんでいる。

ルナツーで採掘される鉱石は地球連邦軍がそのほとんどを独占的に掌握しており、地球連邦軍の宇宙における最前線基地もここにある。しかしルナツーは、あまりに広い範囲に存在しており、たとえ強力な地球連邦軍といえど全部を完全に掌握することはできなかった。

そのためいくつかの大型の小惑星はジオン軍が占拠していた。

地球で鉱山を占領し、遠路はるばる月の裏側のジオン公国に大量の鉱物資源を長年にわたり送り続けているマ・クベ大佐の輸送船団とルナツーの鉱石資源はジオン軍の命綱だ。

激しい小競り合いはあるものの、大きな戦闘がここで起きないのはどちらの陣営にとってもここが生命線だからである。

その意味では下手な協定で定められた中立区域より、大気圏前に定められた、戦闘をできるだけ控える艦艇待機区域やルナツーなどの〈暗黙の了解区域〉の方がよっぽど安全な中立地帯といえるかもしれない。

そのルナツーのポイント ＸＸＸ－０－Ｌ１２にはジオンのモビルスーツ開発基地が建造された巨大な小惑星が浮かんでいる。その開発基地のドッグにハーミット一番艦は入港した。

ドッグにはムサイの他に、ソーテルヌ少将の伯父のコンスコン少将が搭乗している事で有名な重巡洋艦チベや、あの木馬や連邦軍主力戦艦マゼランと互角に戦えると噂される期待の最新型高速戦艦ザンジバルまで停留されていた。正式には高速巡洋艦なんだが、一般兵の間では戦艦で通っているほどの強力な武装を誇る。

そんな中に見慣れない民間の大型輸送船がぽつぽつと入り混じっている。

このような状況は地球・ジオン両陣営によく見られる。

地球の生物が移住する巨大スペースコロニーの早期建造のために、量産された巨大人型作業ロボットがモビルスーツ ザクの始まりだけど、その開発には国のバックアップを受けた民間の重機製造会社を初め、多数の中小企業が加わり協力することで、やっと今のような宇宙世紀と呼ばれる新しい時代を迎えることができたのだ。

そのため、開発に携わった企業の人間達には自然に地球やジオン、宇宙の垣根さえも関係がなくなってしまった。

　もちろん軍事機密の黙秘は前提の上だが、条件さえ合えば
連邦軍だろうがジオン軍だろうが平気で彼らは仕事をする。
　そこには善意も悪意もない。
　あるのは企業として、あるいは技術屋としての新しい未知なる物に
対する探求心と利益追求の経済理念だけだ。
　最近では〈ニュータイプ理論〉とかいう、宇宙生活を続けるうちに
独自の広い発想・感覚を持った世代が登場しつつあるという風潮が
流れているけど、そんな世代より、この技術屋企業の連中たちの方が
よほど不気味で、真の〈ニュータイプ〉なのではないかと思うことがある。
　ジオンで製造されるモビルスーツは基本的にジオニック社と呼ばれる
ジオン公国の支援をうけた軍事企業がほとんど取り仕切っているが、
今回は、より高性能なモビルスーツを開発するために決戦兵器開発部・
回収分析班指導の元に、他の企業にも自信作を作らせコンペティション
（競争）で勝ち抜いた機体を量産、実戦配備する取り決めになっている。
　回収分析班が収集してきたガンダムのデータや残留物、シャア少佐との
対戦データは早速各企業に公開されてみんな大喜びだ。
　特にガンダムのパイロットのうかつさときたら、我々から見れば
本当に表彰状もので主力兵器のビームライフル、ビームサーベルを初め、
シールドなど使えなくなればポイポイ捨てたり、色々破片をまき散らしてくれるので
回収してくれば記載された部品番号やら整備指示刻印などから、連邦軍で
白いモビルスーツの名称がガンダムと呼ばれていることがすぐ判明して
ジオン軍全域に知れ渡ったのはアッという間だった。
　むしろ、あの木馬の方が名称もわからず、潜入偵察も失敗してデータ不足な位だ。
　そういった研究の成果により、今、僕とソーテルヌ少将の眼の前に
している工場では全長が六十メートルの巨大モビルアーマー〈ビグザム〉を
筆頭に、ザクだけでは力不足だと地球占領用の陸戦用モビルスーツ
〈グフ〉、〈ドム〉を初め、水中用モビルスーツ〈ゴック〉、〈ズゴック〉
など強力なモビルスーツが続々と開発製造されている。
　ここにある機体はいずれもギレン大将やキシリア少将の戦略的思惑が
からんで完成したシロモノだ。
　次々とモビルスーツが開発されていくその様は、傍目には一見威勢の
いい光景に見えるが、それを黙って見ているしかないソーテルヌ少将は
実のところニガ虫を噛みつぶしている。

　以前、ソーテルヌ少将はドズル中将にこう進言したことがある。
「ギレン閣下やキシリア閣下が連邦軍を直接叩くことができる地球進行に
軍事予算を向けるのはわかりますが、今はそれにかまけている場合ではありません。
　確かに今の連邦軍にはガンダム以外、戦車もどきや砲撃戦用モビルスーツと
セイバーフイッシュぐらいしかなく、ザクは性能的にも生産数からも宇宙空間では
圧倒的に優位です。
　　ですが、あのガンダムというモビルスーツはあくまで一台のみの〈試作〉で
ただの前座でしかありません。いずれあの高性能を受け継ぎながら格安な廉価版の機体が、
地球連邦の強大な国力をバックにして大量に戦場に投入されるでしょう。その時に迎え撃つ
我々がザクでは歯がたちません。ギレン閣下やキシリア閣下とは別ルートで
ガンダムと互角以上に戦えるザクを超える主力量産機開発の決断をお願いします」
　と。
　それを受けたドズル中将はうむーーっと唸《うな》ってこう答えた。
「シャアとの闘いで短期間に実戦経験を積むことで今 木馬の部隊とガンダムは
力をつけ、前線の兵士からは〈白い悪魔〉と恐れられているそうな。
ソーテルヌよ、おまえは役目上戦えないが、もしおまえが俺の立場ならガンダムどう潰す？」
「そうですね、私ならガンダムの後方に事前に宇宙機雷群を配置。ガンダム一機に
対し、バズーカを装備した八十機のザクを用意し、二十機ずつ集中的に順にぶつけます。
そのあと移動用プロペラント〈燃料〉とビームエネルギーが消耗したガンダムに対し、
バズーカとヒート・ホークで武装させたシャア少佐のザクでとどめを刺します」
「えらく高くつく戦いだな、ザクはそんなに回せんぞ」
「経費に見合う戦果になれば良いと考えます。後に危険となりそうな敵は
早めに数で潰します」
「ははは!!　さすがいい答えだ。俺でもそうする。ソーテルヌ、やはり戦争は数だよな」
　フランケンシュタインの怪物に似た笑顔で高笑いするドズル中将。
「はい」
「わかった。新型主力機の件、公王には俺とガルマで進言してみよう」
「ありがとうございます」

　　こんないきさつがあり、公王直々に予算が承認されてザク後継機の開発が
各地で行われている。
　最初は渋っていたギレン閣下やキシリア閣下も悪名の高まりつつあるガンダムの
存在は知らないわけではないので、後の保険のつもりで成り行きを黙認した。

　実戦配備を待つ、一連のモビルスーツを見終わったあと、地下工場へ
向かうエレベーターに乗り込む僕とソーテルヌ少将。
　停泊中に補給作業を進めているハーミッで休憩待機のはずのミラン・アギ操舵長が、
「待って下さい、私もお供します！」
　と、扉が閉じかけたエレベーターにハァハァ息を切らせながら駆け込んできた。
　ミラン・アギ少尉はウェーブのかかった青いロングヘアーが印象的な童顔の女性で、
我がハーミット一番艦の操舵長を務める。
　弱冠十九歳の女性が操舵長というのはジオン軍全体で見ても珍しい。
　艦船操縦に関しては優秀な人材として知られていたが、なにぶん若い女性ということで
前線の部隊では年配の男性操舵長の補佐としてたらい回しにされていたところをズバ抜けた
才能に惚れ込んだソーテルヌ少将にスカウトされた。
「いいよ、早く乗んな」
「あぁっ、イチロー中佐ありがとうございます！」
　開ボタンを押し続けてミラン・アギ操舵長が乗り込んだのを確認してから
エレベーターを作動させる。
　プレート型携帯端末に表示された、各試験用モビルスーツのデータを見ながら僕は
ソーテルヌ少将に問いかけてみた。
「今地球に先行投入して猛威を振るっている陸戦用モビルスーツの〈ドム〉なかなか
いけてますよ。これにスラスター（燃料噴射推進器）とかで宇宙仕様にした
〈リックドム〉で決まりですかね」
「多分駄目でしょうね。基本的に宇宙戦用のモビルスーツは推進用プロペラント（燃料）の
積載量と姿勢制御スラスター（推進器）の配置位置や数が勝負なのよ」
「そんなもんですか？」
「そんなもんよ。連邦軍が出してる広報アニメのオモチャとかじゃガンダムなんて、
弱点はここですよ、爆弾でも仕掛けて下さいよって感じでメンテナンスハッチだらけ
だけど（笑）、実物はその位置にはリトラクタブル（開閉）式の隠しバーニアだらけでしょ？」
「確かに……（笑）みんなあの機体の動きの良さには翻弄《ほんろう》されてますね」
「だから地上で好成績を出せたからといってドムを後付装備で、宇宙戦用に
仕立て直しても、最初から空間戦闘を前提に考えて作られたガンダムのような
モビルスーツ相手にはあまり優勢は保てないのよ」
「でも宇宙機動重視のモビルスーツを追求していくとザクより操縦が難しくなりませんか？」
「そうなの。だから老若男女に関わらず、ジオン軍人みんなが慣れ親しんできたザクを
参考に一から新開発して、連邦軍の主力モビルスーツと戦える機体を作らないと駄目なのよ」
「口で言うのは簡単ですが大変ですよ。誰でも簡単に乗れる安くてタフな高性能汎用
量産機ってのは」
「大変でもやるのよっ!!」

「現場はザクでいいから早くもっと寄こせ!! の一点張りですしね」
「たく、人の気持ちも知らないで……　ザクより格段に強いはずだからなめてると
瞬殺されるわよ。数も多いだろうし。ザクでは無理なのよ、ザクでは！」
「あの……、ちょっといいですか？」
「何？」
「これから行く地下工場で私の姪が待っているんですけど、彼女なら中佐や少将の
お力になれるかもしれませんよ」
　今まで僕とソーテルヌ少将の会話を黙って聞いていたミラン・アギ操舵長が
会話に入ってきた。
「あなたの姪？、何が出来るの？」
「モビルスーツ開発メカニックを志望しているんです。あの娘」
「どのくらいやれる？」
「とにかく機械工学に関しては優秀なんですよ。モビルスーツの設計だけなら
ソーテルヌ少将より上かもしれません」
「へぇー、私より上ね……」
　怪しい笑みを浮かべるソーテルヌ少将。
「だって彼女、予算と工期さえあればガンダムだって引いてみせる（設計図面を）って
いつも言ってますから」
「そいつは頼もしいわね。ぜひお会いしてスカウトしなきゃ」
「でも彼女おとなしくて人見知りが激しいから注意して扱わないと……」
「心配しない心配しない、お姉さんがやさ〜〜しくかわいがってあげるから♪」
（この人、本当に少将?!　ていうか、ただのレズとちゃう?!）という僕たちの疑いのまなざしを
ひょいひょいとソーテルヌ少将がかわしていると、丁度チーーンと到着のブザーが鳴った。
「さーて、着いたわよ。楽しみねぇ、どこにいるのよ」
　キョロキョロ周りを伺う少将。
　巨大な地下工場には、二機の二十メートル級重モビルスーツがそびえ立っており、僕たちは
その足下にいる。
　ザクの面影はあるけれど、どちらも兵士というよりは騎士といった風貌の勇ましい姿を
した異様なモビルスーツだ。
　思わずあっけにとられて見上げていると、作業服を着た連中に混ざって高級な背広を着こんだ
民間人の一団が、青い髪をしたショートカットの小さな女の子を連れてこちらに歩いてきた。

　背広組の中の一人が嬉しそうに声をかけてくる。
　眼鏡をかけた中背の調子のいい若い男だ。なんかおちゃらかでボンクラっぽい。
「やぁやぁ！　あなたがあのハルカ・ソーテルヌ少将ですか、いやあ〜〜、ジオンクロニクルの写真よりずっとかわいらしくてべっぴんさんだ〜〜！」
「え〜っと、なにが〈あの〉なのかよく判りませんが、私が〈決戦兵器開発部・回収分析班〉総指令のハルカ・ソーテルヌですが」
「はじめまして！　わたくし、まだまだ新参者の〈アナハイムグループ〉総帥キルヒ・レィツと申します。よろしくっ！」
「はあ、よろしく……」
　目の前のアメリカ野郎は馴れ馴れしくソーテルヌ少将の手をとり、両手で握ると感激しているのかブンブン振り回した。
　僕は少将の手にからみついた男の指を一本一本ひっぺがしながら問いかけてみた。
「たしか〈アナハイム〉といえば冷蔵庫とか作ってる有名家電メーカーですよね」
「はぁーい、冷蔵庫から宇宙戦艦まで工業製品ならなんでも造るのがわたしどものポリシーでぇーす！」
「ジオンだろうが連邦だろうが見境なしにな」
「はぁーい、純粋なフェアスピリット・カンパニーでぇーす！」
「そういうどっちつかずは、世間ではこうもり会社とかブラックゴースト（死の商人）とかって呼ぶんですよ」
「ハイエナグループにバットカンパニー、ベストパートナーだと思いませんかー?!」
　これまでおちゃらけていた男の眼鏡の奥にのぞく瞳が怪しく光った。
「へぇ、そのハイエナ集団にこうもり野郎たちがなんのご用かしら？」
　ソーテルヌ少将は来客用の笑顔だけど、もちろん眼は怒り狂っている。

「本日は目の前にある、二体のモビルスーツの操縦系についていろいろとお話に伺いました」
「操縦系の？」
「ハイ、現在間に合わせで付けている、古臭くて性能が上がれば上がるほど操縦が難しくなる
コクピット周りをわたしの考案したアイデアで革新的に変えてみせまぁーす！」
「確かにいくら高性能なモビルスーツを作っても、肝心のコクピットがそれを生かせないと
無駄になっちゃうけど……」
「わたしが設計図引きました。ごらんくださーい！」
　横にいる部下から図面を手渡されると、キルヒ・レィツは僕らの目の前で堂々と図面を
広げて見せた。
「おおっ！　死角のない全方位スクリーンにバイオコンピュータのパイロット支援コンソール!!
連続使用可能なエアバッグ他、安全装備てんこもりか……」
　今まで見たことがない斬新なコクピット設計に思わず唸ってしまった。
「うっ、凄いな、これ全部あんたが考えたの？」
「驚くことはありませーん。いまどきエアバックなんて、エレカ（電気自動車）にだって
付いてるし、球体型全方位モニターなんてコンピューターゲームでも常識なのに、
安く作れ安く作れの一点張り。全くお偉いさんの頭はイカれてまーす」
「確かに高くつきそうだし開発に時間がかかりそうだけど、今まで誰もこんな発想で
コクピットを作ろうなんて思わなかったわ。だって元々が土木作業用機械だったから」
「残念ながら新参者で今回は操縦系程度しか関わることはできませんでしたが、
いずれ、あらゆるモビルスーツはアナハイムの元で誕生させまーす!!　我々がシェア独占して
みせまーす!!」
「あんた、キャラと頭の中身が反比例してるわよ」
「そんなこと言われたのあなたが初めてでーす！」
　アナハイムの総帥キルヒ・レィツに少将と僕がからまれている横で、
ミラン・アギ操舵長が姪を見つけて呼びかける。

「あっ、チェーン！　チェーンね、久しぶりっ！」
　無表情に黙って僕たちのやりとりを見ていた青い髪の小さな少女は、
「ミランお姉ちゃん……」
　と答えると、ミラン・アギ操舵長の足下にトテトテと駆けてきた。
「元気にしてた!?」
「うん。アナハイムのモビルスーツ、面白くて退屈しない……」
　チェーンと呼ばれた少女は嬉しそうな笑顔で操舵長に頭を撫でられている。
「えっ……？　まさか、このおチビちゃんがモビルスーツの設計が私より優秀とかいうすごい姪?!」
「はい、この子です」
「この子って……、七歳くらいにしか見えないけど」
「七歳ですよ」
「なっ、七歳の女の子にアドバイス受けろってか!?」
「う～ん、少将には失礼なんですけど、でもホントにすごいんですよ。試しに何かチェーンに質問してみて下さい」
　キルヒ・レィツが横で、撫でられ終わって元の無表情な顔に戻った女の子を見てニヤニヤしている。
「チェーン・アギちゃんね……、よし、じゃあチェーンちゃん、ちょっと質問するけどいいかナ～～!?」
「いい……」
「モビルスーツってこれから十年くらい後にはどんな風に変わってると思う？」
　未来予想させて、そのハズレっぷりでこの子の〈程度〉を見ますか。大人げない……

「人型のモビルスーツは突き詰めれば武装・推進用燃料タンク・姿勢制御スラスターの集合体。
これからの主流になる人型を廃したモビルアーマーの形にどんどん近づき、やがて変形して
状況に対応させようとする技術の流行が生まれる。でも、どんな工業製品にも必ずおきる
原点回帰の見直しにより、モビルアーマーの形に近づかなくてもそれ以上の性能を人型の
モビルスーツに持たせればいいという新たな技術の流行がまた発生し始める。そのスパンが
十年から二十年後……」
「えぇ……っ?!」
　思わず僕はソーテルヌ少将と顔を見合わせてしまった。
　なんなんだこの娘?!

「くっくっく、将来性を見込まれてアナハイム・エレクトロニクス、メカニック養成学校の特別コースでお勉強中のお嬢さんですよ、なめてもらっては困りまーす」
「なるほど……、ホントにおチビちゃんの実力は折り紙付きって訳か」
　チェーンの眼と手のひらをジッと見つめるソーテルヌ少将。
　ソーテルヌ少将の眼を無言で見つめるチェーン。
　しばらくお互いの眼と顔を見つめていた二人だったが、先に口を開いたのはソーテルヌ少将だった。
「わかった。ミラン・アギ操舵長、この子の力借りるわ。キルヒ総帥、本日より一年間、決戦兵器開発部・回収分析班総司令権限においてハルカ・ソーテルヌがチェーン・アギの身元を預かります！」
「何をいきなり……?!」
「私付きの〈実地研修〉です。この子の素質も才能も素晴らしいのは判りました。ですが、モビルスーツの開発メカニックは、ただ図面を引いたり、座学を極めるだけでできるほど甘くない。外の世界を広く見て回り、自分の手を汚し傷だらけになって実戦の整備をこなし、機体がどんな風に運用されるのか見て回ったり、機体をテスト操縦したりしなきゃ、いいメカニックになんてなれやしない！」
「アナハイムの養成学校でも三年後には実地研修しまーすよ？」
「早い内から身につけておいた方がいい経験もあるんです」
「うーーん、神童に変な色がついてしまうーー」
「チェーンちゃん、私といっしょに来なさい。あなたの才能はこれから先、きっと私の力になってくれると思う。でもね、手も腕も荒れてないし絶対的な経験不足はごまかせない。だから私について実地研修しなさい。そうすれば必ず一人前のメカニックにしてあげる。あなたならすぐに私なんか超えられるわ」
　少将はチェーンの頭を撫でながら優しく微笑んだ。
「うん……、わかった。そうする……」
　はにかみながらチェーンは小さくうなづくとミラン・アギ操舵長の顔を見上げ、
「わたし、この人と勉強したい。ミランお姉ちゃん行っていい？」
　と聞いた。
「ええ、いいわよ。お姉ちゃんからもあなたにお願いしようと思ってたの。ソーテルヌ少将の力になってあげて」
「うん……」
「よしっ、決まりね、それじゃあキルヒ総帥、あとの手続きよろしくお願いします」

「仕方がない、わかりました。ミランさんから頼まれて養成学校から連れてきましたが
我々もチェーンお嬢さんばかりにかまっていられません。今日の我々の目的は
ソーテルヌ少将に〈ゲルググ〉と〈ギャン〉について直にコメントを頂くことでーす」
「そうですね少将、新型ザク後継機、あちこちのメーカーに参入させてやっとどうにか形に
できました。これからこの二機をコンペで競わせながら叩き上げていきますが、
現時点でのご感想は？」
　ためしに聞いてみた。
「あのさナガイ、このブタ鼻のついたインディアンみたいなヤツといい、チェスの駒みたいな
ヤツといい、なんでこうジオンのモビルスーツっていつも悪人づらかな？
　眼だって一つ目だよ？　妖怪じゃあるまいし」
　あまりにあんまりなつっこみ(笑)に、思わず背広姿のジオニック社の重役を初め、関連会社の
人間達が揃って反論を始める。
「メインカメラなんか一つで充分ですよ！　ジオンの技術ならモノアイで立体視から超望遠まで
全部やってのけます。おまけにレール移動式カメラだから連邦軍のモビルスーツより死角が
少なく低コスト!!　その素晴らしさがあなた方お偉いさんには判らんのですよ」
「そうそう、この勇ましいデザインセンス判って下さいよ」
　ちなみにザクに少し似ているインディアンみたいなヤツの名前は〈ゲルググ〉。
　回収分析班の仕事の集大成といえるものでガンダムからの回収、分析データを元に徹底
研究して作られた重モビルスーツ。　あの強力なビームライフルと、ほぼ同程度の威力の
ビーム兵器を持たせたジオン軍初のモビルスーツだ。　スラスターのパワー、装甲、機動性、
センサー探知能力など、あらゆる面でガンダムを一段上回る優れもので後継機コンペの本命だ。
　もっとも、まだ量産性に難がある点と、高性能な分だけメンテや調節に時間がかかる点、
操縦がやはり今のままだとザクより際だって難しく、ベテランじゃないとその高性能に
パイロットが振り回されてしまう点など目の前の試作機では詰めがまだまだ甘い。それでも
量産性に関してはようやく目処はつけることができた。
　ザクのマシンガンも効かないあのガンダムのチタン合金の装甲強度に関しては、
ジオンがいつもモビルスーツに使っている超硬質スチール合金の改良で同性能の物が
つい最近開発できたのはありがたい。
　水中用モビルスーツの爪（アイアン ネイル）造りの試行錯誤が役にたった。なんと言っても
鉄の合金は安いのがうれしい。これで量産にも弾みがつく。
　もう一機のチェスの駒みたいな顔をした西洋鎧の騎士の様なカッコをした
ヤツの名は〈ギャン〉。
　こちらもゲルググに基本性能は弱冠劣るものの、ガンダムとほぼ互角の実力を持つ
重モビルスーツだ。

　ビーム兵器が主な武器のゲルググに対して、こちらのギャンはミサイル兵器が
主な武器。
　コクピット周りにアナハイムが少し手を入れた機体で、高性能の割に操縦し易く、
広範囲ばらまき型のミサイルをシールドに仕込んであることから、防御イコール攻撃が
可能で初心者にも優しいモビルスーツだ。
　ちなみにこの試作機はキシリア閣下の命《めい》によりコンペが終了次第、再調整して
マ・クベ大佐にお渡しすることが決まっている。
「冗談はさておき、お集まりのみなさん方、これからするお話をよく肝に
銘じておいて下さい」
　こほんと咳をして、ソーテルヌ少将は背広勢、作業服勢の前に改めて向き直った。
「じょ、冗談でしたか……、あははは……」
　背広勢が苦笑いする。
「さて、お集まりのみなさん方が今まで丹精込めてここまで造り上げてきた
二機のモビルスーツですが、おかげさまでどちらも基本性能は〈ガンダム〉に
限りなく迫り、量産も可能なようです。　　しかしーー」
「……」
　固唾を飲んでソーテルヌ少将の次の言葉を待つ企業の人間達。
「しかし、残念ながら今のままでは二機とも採用したいと思いません」
　どよめく背広勢。
「今まで何度もみなさんに言ってきたように、私が目指すのはガンダムクラスの
強力なビーム兵器を主体にした、誰が乗っても操縦がし易い、パイロットの安全を
考えたタフな機体です。
　パイロットが無事帰ってきて、次回からその経験が生かせるといった……
　その点で、ここにあるゲルググとギャンはそれぞれ不合格です。
　今日皆さんは帰ったら、大急ぎで機体の再検討をして、生まれ変わったような
素晴らしいモビルスーツを一日も早く私の前に見せて下さい。以上！」
　唖然とする一団。
　短くてやたら手厳しいスピーチをしたソーテルヌ少将は、
「帰るわよ、視察終わり！」
　と言い放って、もと来たエレベーターに向かってすたすた歩く。慌てて後を追う。
　くすくす笑うチェーン。

　帰りのエレベーターの中は静かだった。
「バッサリ切り捨てましたね。でも少将は、理想を追い過ぎかもしれませんよ。
多少妥協しないと試作機の完成に遅れが出ます」
「これは妥協が許されない理想よ」
　反論を許さない厳しい目で僕を睨みつけるソーテルヌ少将。
「ええ、判ってます、妥協なんてしませんよ。お偉いさんが言いそうな事を先回りして
言ってみただけです」
「ここで私たちが引き下がれば、必ず若い新兵や老兵にシワ寄せがいく。
それは過去の戦争で証明済みだ！」
　ふと、チェーンを見てみた。
　ピリピリとした会話の中、ミラン・アギ操舵長と手をつないで無言で僕たちを見つめている。
　何を想っているのだろうか。
　大人には、少しでも良い世界を後に続く子供達に見せてやる責任があるというのに、
なんともひどい世界で済まないと思う。
　エレベーターから降りた僕たちは、補給が済んだハーミットに乗り込み、開発基地から
出港させた。
　ザク後継機開発の前途多難さを改めて再確認させられた回収分析班だったが、
チェーンという、未来を見つめる小さな収穫があったのはせめてもの救いだった。

　第三話予告
ザクの後継機開発計画〈ゲルググ・プロジェクト〉で揺れる
　ソーテルヌ少将ひきいる回収分析班の前に戦闘を積み重ね、
〈連邦の白い悪魔〉と恐れられるまでに成長した
　モビルスーツ　ガンダムが立ち塞がる!!
〈戦わない部隊〉回収分析班は生き延びることができるか?!
　次回、「恐怖!! 機動ガンダム遭遇戦」
　きみは回収の果てに何を見るか?!

第三話 恐怖!! 機動ガンダム遭遇戦

１．恐怖!! 機動ガンダム遭遇戦

　ゲルググとギャンの視察を終えた回収分析班はポイント ＸＸＸ－０－Ｌ１２を後にした。

　現在、木馬を追跡中のシャア少佐の後を追うためにハーミットを地球方面に向けて急行させる。

　開発基地から研修として同行している少女チェーン・アギは、地球連邦の民間人で厳密に言うと微妙な立場になるのだけれど、所属がアナハイムというグレーゾーンに立っているので、戦争前に別れたミラン・アギ操舵長とも親族として、機会があれば今回のように比較的自由に交流ができる状態だ。

　　もっとも七歳の女の子を敵扱いするような奴はソーテルヌ少将の薫陶《くんとう》が効いた回収分析班にはいない。

「ミラン操舵長、前方のミノフスキー粒子の散布濃度はどんな感じだ？」

ハーミットの艦橋で前方から後方へ高速で流れる星をにらみながら尋ねた。

　ここでミノフスキー粒子についてちょっと解説しておこう。

　ミノフスキー粒子とは、後に地球連邦に亡命したジオンの科学者ミノフスキー博士が発見した人畜無害の特殊な粒子で、モビルスーツや高出力の乗り物に使われている常温核融合エンジンの制御を初め、艦船に反重力効果を発生させて、大気圏内で飛行船のように浮かすことができるミノフスキークラフト効果や散布すると強力なレーダー妨害効果が発生するという宇宙世紀最大の発見だ。

　特にミノフスキー粒子の一番やっかいなのは、レーダー妨害のために戦場で大量に撒かれると、敵味方関わらずレーダーが使い物にならなくなってしまう点で、これのおかげでレーダーに頼らないセンサー類（一例を挙げるとカメラなどに使う光学センサーなど）を使うか、人間の眼による有視界戦闘しかできなくなってしまった。

　レーダーに頼って遠距離攻撃からの命中率が１００％だったミサイル類が一切使えなくなり、替わって人間操縦の接近戦用モビルスーツ　ザクが劇的な決戦兵器になれたのもミノフスキー粒子が存在した為だ。
　あと木馬やザンジバルなど、大気圏内航行も可能なタイプの艦船は推進エンジンや
艦底から発生して吹き出す濃密なミノフスキー粒子のミノフスキークラフト効果が
自然のバリアになる。
　攻撃の際には、ビーム兵器や実弾兵器の弾道が歪まされて非常に当たりづらくなるので、ベテランは無駄弾を避けるため、一見すると、当て易そうなエンジンや艦底は狙わないのが常だ。
　ミラン操舵長にミノフスキー粒子の散布濃度を尋ねたのは、船の操舵輪の前に取り付けられた環境監視モニターでミノフスキー粒子の散布状況が一目で正確に判るからだ。
　散布濃度が薄ければ少しでもレーダーが使えて、広範囲に敵の艦艇が発見できる。
　こちらのレーダーが使えて相手を発見できるなら、当然敵のレーダーもこちらを発見しているわけだが、回収分析班は相手とは戦わず、一定間隔を保って遠距離から監視尾行するのが
基本なので発見されるのは別にかまわない。
　戦闘では勝ち目がないので、常に相手を先に発見して、尾行するか逃げるかできる様にしておくのが鉄則なのだ。
　ハーミットはそのための高性能レーダーには大金をかけている。
　一応 ハーミットには、敵のレーダーから逃れるための黒色のステルス塗装がされていて、敵レーダーには小隕石ぐらいにしかみえないはずだが、昨今のよく訓練された優秀なレーダー監視兵や解析コンピューターの前では、その効果も薄い。
　むしろ黒色という、宇宙に溶けこむ塗装色の方がよほどステルス効果がある位だ。
「中佐、つい最近、この宙域で戦闘があったのかミノフスキー粒子が濃いです」
「目に付く星の数がさっきからやけに減ってきてるがこいつは……」
「潜宙戦《せんちゅうせん》の跡に入っちゃったみたいね。ほら、煙幕ガスで窓から外が
何も見えなくなった」
　潜宙戦とは小艦隊が大艦隊に襲われた際に、小艦隊側がミノフスキー粒子と
煙幕を巻き、宇宙空間を星も見えない真の闇に変えて、逃げるか白兵戦にもちこむかして
少しでも戦闘を有利にしようとする戦術の一つだ。
「視界ゼロなので、万が一の小惑星との衝突を防ぐため、ハーミットを警戒速度に落とします。
潜宙戦の煙幕の散布範囲から脱出するのに二十分程度かかる見込みですが
ソーテルヌ少将よろしいでしょうか？」
「いいわ。煙幕から抜け出しても、そのままシャア達の跡が追える進路に向けて
おいてちょうだい」
「了解しました」

　グオン！と一声エンジンが唸ると途端にハーミットは減速した。
　天井の大型スクリーンに表示されている重力メーターのバー表示が一気に上昇する。
　無重力の中に磁力靴で立っていなかったら、かなりの重力を受けていたかもしれない。
「おっ、さすが反応速度はピカイチだな」
「その分燃料消費もピカイチですけどね」
　操舵輪を握りながら苦笑するミラン操舵長。
　普段はミラン操舵長の立つ位置から、すぐ後方の床下に収納されている休憩用の
自動伸縮椅子を自分でひっぱり出してチェーンがちょこんと座り、連邦軍でも宇宙食として
普及している水色のペーストが注入された不味そうなチューブ食を飲んでいた。
「二十分も低速前進すると、シャア少佐の見せ場を見逃してしまうかもな」
　笑うソーテルヌ少将。
「いや、ここに至るまでの数回の小競り合いでシャア少佐の手を焼かせたりする、
あのガンダムの性能の凄さは恐れられていて、最近では前線の兵の間でも
〈白い悪魔〉と呼ばれていたりするそうですよ」
「〈白い悪魔〉か……、よく言ったものだ。まあ、あいつの恐ろしさは誰よりも私たちが
一番知ってるんだけどね」
「全くです」

「さてと……」
　軍帽に仕込まれた小型の無線インカムを取り出してソーテルヌ少将は艦内放送を始めた。
「現在、我が艦は潜宙戦の煙幕に入り、低速巡航中です。二十分程度で通過できると思うけど、
煙幕通過後に支障がないよう各自持ち場の注意・警戒を怠らないように。以上」
　戦争前に地球連邦軍の監視下に置かれながら、輸送艦に偽装して秘密裏にモビルスーツ運用を
初めから考慮して建造された軽巡洋艦ムサイをベースに、改造を加えたのが僕らのハーミット
だけど、全長二百メートル程度の船に乗組員が六十名ほどで、物の搬送や清掃など軽作業は
艦内作業ロボットの補佐やコンピューターの自動制御で足りない人員を補っている。
　少ない乗組員の内訳は三分の一が我々の本業の回収分析班で、ハーミット艦内にある
開発研究室や分析室で高速戦艦ザンジバルが一隻買えるぐらいの高性能機材の群れを相手に
作業に追われている。ノルマを達成して手が空いたメンバーはモビルスーツや船の整備をする。
　もう三分の一が医療室、調理室、武器管制室、機関室などの管理をする艦船運行班が
占めていて、最後の三分の一が、艦船の指揮をするソーテルヌ少将率いるブリッジ(艦橋)
メンバーの戦闘班だ。
　当然の話だが突発的な負傷や死亡で乗組員が不足した場合には、乗組員の回復か
補充が済むまで誰かが作業を兼任・代行するハメになる。

　ソーテルヌ少将が艦船指揮やモビルスーツの開発・パイロット、コックさんなど
いろいろ多才なのは、実は必要に迫られて多才になった面が大きい。
　長《おさ》である少将が出張らなければいけないほどのお寒い台所事情なので、
当然部下の僕らがどんな状態なのかは推して知るべしと言っておこう。
　実のところ外の宇宙空間で煙幕が巻かれようが、みんな艦内の仕事に追われていて
それどころじゃないというのが本音だ。
　おそらくソーテルヌ少将の艦内放送の反応は「言われんでもやってるよ」という
適当で無関心なものしか返ってこないに違いない。
　でもこれが非常事態になると、ソーテルヌ少将の一言一言が神のお告げになり
真剣に聞くから、みんな現金なものだ(笑)。
「むうぅ〜〜っ、相変わらず馬耳東風なお馬鹿連中ねっ!!」
　監視カメラがあるわけじゃないのでブリッジから各作業班の連中の様子は見えないし、
顔を合わせて話をしてないから様子がわかる訳がないんだけど、面白いことに、
不思議と顔を合わせなくても上に立つ者には下の者が何をやっていてどんな状態か
雰囲気で伝わってくるんだよね(笑)。
「ったく、潜宙戦の煙幕は結構くせ者なのに！」
「たしかに黒一色で、敵も味方も機影が見えなくなって判らなくなる上に、レーダーが
使えなくて目印の星まで見えなくなるので、現在位置がほとんどつかめずに勘だけが頼りです。
ライトを点けずに真夜中の峠道を車で走ってるみたいで、すごく操縦が難しいです」
　いまいち緊張感のない艦内で一人、必死になって各センサー表示やモニターと前方を
にらみながら、前方から船体にぶつかってくる小惑星の衝撃を舵から感じ取り、
微妙な舵取りをするミラン操舵長。
「ミランお姉ちゃん頑張って……」
「うん、チェーンありがと。お姉ちゃん頑張るよ」
　立場上、たえず心配性にさせられるソーテルヌ少将や僕らは、この二人を見ていると
気が和んで助かる。
「ソーテルヌさん、もう少しで二十分経つ……」
　僕たちのように自前の腕時計は持ってないようだが、正確な体内時計でも
持っているんだろうか、測ったようなタイミングでチェーンが水色のチューブ食を
握った右手で前方を指す。
　晴れ始める煙幕。
「そろそろか……、みんな気をつけろ！」
　周りの人間達にソーテルヌ少将は注意を促した。
　ウゥ〜〜、ウゥ〜〜、ウゥ〜〜
　突然、艦内に響き渡る非常警報のサイレン。
　めったに鳴らない警報に一瞬で艦内に緊張が走る。

「どうした、フルヤ伍長!?」
　ソーテルヌ少将といっしょにブリッジの後方でレーダー監視をしているフルヤ伍長を振り返る。
　壁面に設置されたレーダー観測盤を指さし慌てるフルヤ伍長。
「た、大変です!!　木馬が現れましたっ!!　木馬が本艦の危険警戒区域に入ってます!!　状況レッド!!」
　危険警戒区域で敵艦と遭遇して状況レッド……　反転して敵前逃亡もできないほど接近しすぎてしまった状況。
　先手を仕掛けてなんらかの戦闘をしなければ生き延びられない最悪の状況。
「光学望遠最大!!　画像を天井モニターに回せ!!」
　ソーテルヌ少将の指示が飛ぶ。
　宇宙空間に羽の生えた白い馬の姿をした艦船が一隻、天井の大画面モニターに小さく写された。
「間違いない、木馬だ！」
　ブリッジに戦慄が走る。

　〈木馬〉ーーーー
　地球と月の間にある宇宙移民用スペースコロニー〈サイド７〉からシャア少佐の追撃を躱《かわ》しながら発進してきた地球連邦軍の強力な輸送艦……。
　いや、あの最新型はモビルスーツ運用を重視したムサイやザンジバルに匹敵する戦闘空母か要塞攻略用の戦闘強襲艇だろう。火力や装甲がケタ外れだ。アレが、ただの輸送艦のワケがないだろう。
　送られてきた対戦データを見る限り、まだ新型艦なので船員《クルー》が艦船運用に慣れていないのか、あまり上手に使われていない気がするけど、ジオンきっての戦闘のエース、シャア艦隊を除いて立ち塞がった者は全て撃破してきた恐るべき連中だ。
　正直、木馬と一対一で戦っても主砲がなく、対宇宙戦闘機用の機関砲と熱追尾型迎撃ミサイルしかないハーミットでは全く勝ち目はない。
　それに加えて木馬が、あのガンダムたち最強モビルスーツと連携プレーで向かってきたら間違いなく明日の太陽は拝めない。
「く……、なんで出くわしたっ?!」
　ソーテルヌ少将の額に汗が浮かぶ。
　ここまで近づいたら、逃亡しようにも反転しかけて横を向いた瞬間に、被弾面積が大きくなる側面を晒して長距離射程の木馬の主砲やジオン軍より優秀なメガ粒子砲の格好の餌食になる。
　白旗をあげて降参する手もがあるが、〈決戦兵器開発部・回収分析班〉であるこの船には、地球連邦軍が涎を垂らして欲しがる機密情報や機材がてんこもりだ。
　ドズル中将からも「白旗をあげた場合は名誉の戦死である。機密保持のため自爆せよ」と

言いつかっている。

２．秘策ドラッグレース

　つまり、事態がここまで最悪になったら、駄目もとで戦う以外、僕らが生き残る道は
もうないという事だ。
　問題はどうしたら良いのかということだが……
「広範囲に巻かれた煙幕の中で
木馬を追っていた足の遅いシャア少佐のファルメル(シャア専用ムサイ)が遅れて、
足の速い木馬と足の速い私たちが揃ってガチ合ってしまったみたいです！　すみません！」
　ミラン操舵長が謝る。
「あなたのせいじゃない、こいつは運が悪かったとしか言いようがないわ」
「しかし、ソーテルヌ少将どうしたものでしょう、あと三十分ほどで完全に木馬の
主砲の射程距離に入ります。そうなったら必ずガンダムも出してくるに違いありません」
　ソーテルヌ少将は目をつむり、腕を組んでしばらく考え込むと、ふいに目を開いて言った。
「うーーん、危険だけど、もうこの作戦しか思いつかないなーー。ナガイちょっと耳貸して」
　耳を貸すとごにょごにょと相談を持ちかけてきた。
「ええっ!?　僕にシャア少佐のマネごとをやれと!?」
「うん。私はハッタリかまし役に回らないといけないから、実行役はあんたしかいないの。
あんたがカギなの」
　とんでもないプランを聞かされて迷っていると、少将は無線インカムで艦内放送を始めた。

２．秘策ドラッグレース
「本艦はこれより木馬と三十分後に戦闘に入りますが、あなたたちが知っての通り
本艦にはロクな武装がありません。ガチンコ勝負ではかないません。ですので本艦は
ここで停止し、木馬に対してザクで〈特攻〉を仕掛けます。今回は特攻と言っても
特殊任務攻撃です。自爆させるつもりはありません。ですがパイロットが
ヘボだと〈特攻〉イコール自爆になりかねないので、我が回収分析班のエース(笑)で
あるところのナガイ中佐には大いに期待したいものです。できますよねっ♪」
　ウインクするソーテルヌ少将。
「この状況を切り抜けられるなら、自爆でも何でもしますがね」
「というわけで、みなさんには木馬がガンダムを出してきたとき、できる限り
持ちこたえるよう迎撃の準備をお願いします。整備班は後で指示を出しますので
ザクの緊急改造の準備と整備をして、いつでも出撃できるようにスタンバイして下さい。
実戦です。総員持ち場で全力を尽くして下さい。以上」

　さあ、実戦だ。正直後がないし、名案なんかあるわけがない。こうなったら
ソーテルヌ少将の指示になんでも従うしかない。
「ナガイ、確か、回収分析班にモビルアーマー〈ビグロ〉用の試作与圧服がいっぱい
あったでしょう、あれに着替えてスタンバイしといて」
「ビグロっていえば加速Ｇが物凄い、メチャクチャ速いヤツでしたよね」
「ザクであれ以上の加速をしてもらうから覚悟しといてね。詳しいことはブリッジ(艦橋)から
降りて、下のザク格納庫に着いてから説明するわ。チェーンちゃんも私についてらっしゃい。
早速あなたのアドバイスが欲しいの」
「はい……」
　椅子から降りてトテトテと歩いて少将の横に付く。

　四分後、出撃準備が済んだ僕たちはザク格納庫にいた。
　ここに四機のザクが格納できて、船体前部に搭載している大気圏降下カプセル〈コムサイ〉
にも二機格納できるから、計六機のザクが格納されてあってしかるべきだが、戦闘はしない
はずだからと補給もされずハーミット一番艦には黒色に塗装された実験用ザクが二機と、
部品取り用のザクが一機しかない。
　コムサイに一機格納してあるので、格納庫には出撃可能なザクが一機しかない状況だ。
「寒い……」
　ポツーンと格納庫に一機だけ立っているザクを見つめてチェーンがつぶやいた。
「チェーンちゃん、学校で勉強してるだけじゃわからないでしょう、
どう？　実戦のこの空気」
「実戦って寒い……」
　うちの部隊が特に寒いだけなんだけどね。

「じゃあ作戦の簡単な説明をするわね。ナガイはこれから木馬のブリッジ(艦橋)に
向かってザクの最大戦速で一直線に突進して、木馬のブリッジ横で
私の指示があるまで待機。ガンダムが出撃する前に上手くやってよね。それだけ」
「ちょ、それだけって……、木馬のブリッジ直前って一番集中砲火される、弾幕が濃い
危険ゾーンじゃないですか」
「猛加速で振り切って躱《かわ》して、ブリッジ横ですぐに急停止できれば集中砲火されずに
済むわよ」
「その猛加速と急停止ってどうやるんですかっ?!」
「シャア少佐がよくやるでしょう、通常の三倍の加速ってヤツ。あれをやって欲しいというか、
超えて欲しいの」
「た、ただのザクで?!　無理ですよ、そんなのできるはずがない!!
大体あれは指揮官用に高速改造されたザクで……」
「馬鹿ね、あれ普通のザクよ」
「えっ、ただのザク?!」
「そうよ。あんたまでジオン軍広報部のプロパガンダ(宣伝活動)に載せられてどうすんのよ。
エンジンとかスラスターとかプロペラント(推進燃料)タンクとか見なさいよ。赤色の塗装色が
違うだけでみんな同じでしょう」
「言われてみれば……、でもデータでは本当にシャア少佐は通常の三倍の速度
出してますよ」
「ますます馬鹿ね。ザクはね、限界まで性能を出し切れば設計上は通常の五倍まで
速度を出せるのよ。上手くやればガンダムだって超えられるわ」
「ウ、ウソでしょ……?!　ザクってそんな優秀な機体だったんですか?!」

「違うわよ、パイロットが優秀なのよ。褒めるの癪に障るけどシャア少佐が優秀なの」
「パイロットの腕が優秀?!」
「そう。並のパイロットなら通常の三倍も速度を出したら通常の三倍でプロペラントが
減っていくから怖くて加速できない。三倍で加速すれば慣性の法則があるから、
停止するのだってスラスターの逆噴射ブレーキが必要で三倍プロペラントが減る。
プロペラント使い切って宇宙空間で立ち往生は怖いから、いきおい並のパイロットは
みんなセーブしてアクセルを踏みきれないのよ。
後で回収してもらえる保証はないからね。シャア少佐はミッション(作戦)を
短時間でこなして帰還できる絶対の腕と自信があるからあんなマネができるの。
それと地道にプロペラント放出量を節約するプログラムディスクづくりの腕もいいのよ彼は」
「ていうことは、つまり……」
「そう、今回の作戦はザクの性能を限界まで引き出して〈通常の五倍〉の速度で突進して
木馬のブリッジ前で急制動ブレーキが掛けられるか、木馬が発進させるガンダム
より、いかに早くブリッジを人質にとれるかが勝負の秘策ドラッグレース！」
「木馬のブリッジ横にたどり着くまでに、プロペラントを全部使い切る勢いで飛べと
言うことですね。わかりました少将」

　了解した。
　強烈な加速Ｇが予想できるが耐えてみせる。
　集中砲火も躱しきってみせよう。

「最後に急停止する方法だけど、チェーンちゃんなにか良い手ない?!」
　楽しそうにソーテルヌ少将の秘策を聞いていたチェーンがささやく。
「停止直前に急停止できるだけのプロペラントを積んだ両足を前に振り出して、
プロペラントを噴射して爆破。強制停止させる……」
「なるほど、さすがね。強制停止はナガイと私のどちらでもできるようにしておくわ」
「足を強制爆破？　いいんですかね」
　不安そうな僕を見つめてチェーンはこう言った。
「足なんて飾りだから大丈夫……　これ食べて元気出して」
　食べかけのチューブ食を差し出す。
「これか……いらない。うまいかこれ?!」
「激マズ……」
　チェーンのしかめっ顔に思わず笑った。
「ははは、元気が出たよ。じゃあお兄ちゃん行ってくるよ。
チェーンも頑張って少将を支えてやってくれ」
「気をつけて……」
　カスタムメイドのマウスピースを口に入れ、ヘルメットを被り、対光バイザーを閉める。

　ザクの左胸にあるコクピットにつながる自動昇降機に乗り込み上昇する。
　下に揃っている整備員達一同に敬礼する。
「さあ、整備のみんな急いで！　足にプロペラントタンクの追加、大急ぎで‼
あと、ザクの防弾シールドの内張りにガンダムが廃棄したシールドから
ひっぺがしたチタン材を貼り付けといて‼
　私はブリッジに戻るからチェーンちゃん、あとお願いね」
「はい……」
　それから二十五分後、僕は緊急改装された回収分析班専用ザクを
木馬に向けて猛スピードで出撃させた。
「勝負だ、木馬‼」

　木馬のブリッジに向けて、左舷後方から僕がザクを通常の五倍の猛スピードで
近づけると予想通り機銃や機関砲、迎撃ミサイルの猛烈な集中砲火を浴びた。
　後で思い起こせばほんの五、六分の戦いだったけど、これは凄まじい戦いだった。
　隠密作業用に視認しにくい黒色で塗装されたザクなので、狙っても弾を当てづらい
はずなんだけど、これだけ弾幕が濃ければ狙わなくても、流れ弾や跳弾が
四方八方から飛びこんでくる。
　今のところ致命的な打撃はないけれど、少しずつ確実にザクの超硬スチール装甲が
削りとられていく。
　弾着の衝撃で機体が縦横メチャクチャに揺れまくる。
　通常の五倍の猛スピードとガンダムシールドを内張りにしたシールドで、
かろうじて耐え凌ぎながらひたすら突き進む。
　しかし予想以上の凄い加速Ｇだ。顔がひきつる。

　ガッ‼
　ビシッ‼
　チューーン‼
　カーーン‼
　ズコッ‼

　嫌な弾着音が次々とコクピット内に響き渡る。

　ガシッ‼

　機体の三十箇所に設置されている小型補助カメラの一つがまたやられたらしい。

　画像表示モニターの一つが一瞬ザザッと砂嵐になる。
　三十箇所のカメラの画像を四十秒ごとに切り替えて表示するのだが、やられるたびに
表示場面が消えていき、十カ所くらいしか写ってないのが損傷の深刻さを教えてくれる。
「く、く、くそーーっ!!、いつまで続くんだーー、この攻撃ーーっ!!」
「あと、あと少し、我慢してナガイ！」
　タフで有名なザクの通信用モニターの画像は、強制停止のボタンを握りしめながら
タイミングを計っている沈痛な面持ちのソーテルヌ少将を映し出している。
　汗だくのこちらと同じくらい汗びっしょりのようだ。

　バガッ**!!**

　ザクの左肩に物凄い衝撃が響いた。
　ザクの左肩にはザクの装甲の中でも一番丈夫なスパイク装甲が取り付けてあるが、
特殊弾頭に直撃されたらしい。
　粉々に砕かれてダメージ警戒アラームが鳴り響く。
　シャア少佐が木馬を攻撃する際、いつも左舷に集中攻撃するようソーテルヌ少将が
命じてくれているおかげで、かなり迎撃銃座が潰されて接近しやすくなってるはずなのに、
まだこの火力・弾幕かよ!!
　ちくしょう!!　連邦の空母は化け物か?!

　ビシッ**!!**
　バキーーン**!!**
　ズドーーン**!!**
　キィーーン**!!**
　ガシュッ**!!**
　ミシミシッ**!!**

　必死に回避運動をしているが弾着音がどんどん酷くなっていく。
　メインカメラがやられていないのは奇跡だが、小型補助カメラの画像は
今では四カ所しか写っていない。
　コクピットを揺さぶる振動は激しさを増すばかりだ。
「ちぃーーっ!!、無限に続くんじゃないか、これーーっ?!」
　思わず泣き言を叫んでしまった。
　と、思ったら唐突にその瞬間はやってきた。
「あっ、木馬のヤツ、カタパルトからガンダムを出してきたっ!!　こちらに向かってくる!!」
「ええっ!!　こんな時に出してきましたか、あの野郎!!」
　反転してガンダムを追ってハーミットの援護に向かうか一瞬迷う。

「ナガイ、ブリッジよっ!!　すぐ停めてっ!!」
「でも、ハーミットが!!」
「いいからこっちはなんとかするから停まりなさいっ!!」
「りょ、了解!!　推進機関停止!!　脚部強制爆破っ!!」
　爆破するまでもないくらい銃撃でズタボロにされた両足を前方に投げ出して
プロペラントに一気に点火、強制爆破する。

　ズドン!!

　前方から襲ってくる強烈な加速Ｇに気絶しかけながらなんとか耐えきる。
　朦朧とした意識をはっきりさせようと必死に頭を振る。
　マウスピースをつけているにも関わらず、虫歯が一本砕けて、どこか口の中を切ったらしい。
　痛みで意識が逆にはっきりしてきた。
　へろへろになりながら現状報告は忘れない。
「ブリッジ所定位置、確保完了！」
「了解、やったわねお見事！　あとはこちらの仕事、まかせなさい！」
　明るい声でソーテルヌ少将が、ねぎらいの言葉をかけてくれた。
「さ、始めるわよフルヤ伍長、木馬に緊急連絡して!!
内容は ”我はハーミットのソーテルヌ少将。通達があるため即時停戦を求む”で」
「了解！　チャンネルつなぎました。先方は……ブライト・ノア少尉と言ってきています」
「よし、木馬のブリッジの通信画像を天井のメインモニターに回して！」
「了解！」

　しばらくするとメインモニターに木馬の艦長ブライト・ノア少尉の敬礼をしたアップが映し出された。黒髪で細眼のまだ二十歳くらいの若い青年だ。
　ハーミットのブリッジを狙って今にもビームライフルを撃ちだそうと迫ってきていたガンダムがそれを合図に急停止した。
　ブライト・ノア少尉の命令を待っているのだろう、ライフルの照準はブリッジに合わせたままだ。
　性能の良さそうなスコープをつけている。さぞや精密射撃ができるに違いない。いけ好かないモビルスーツだ。
　うちの次期主力機にもいつか取り付けてやるからな、覚えてやがれ。
「お初にお目にかかります。私がジオン軍　ハーミット総司令のハルカ・ソーテルヌ少将です。お若い方で驚きましたブライト艦長」
　敬礼してにこやかに見据える。
「初めましてソーテルヌ閣下、わたくしが連邦軍ホワイトベース艦長ブライト・ノア少尉であります。わたくしの方こそお若い女性が 司令 で驚きました」
　こちらも敬礼してにこやかに応える。
「ご用件を伺いましょうソーテルヌ少将」
「はい、ありがとうございます。単刀直入に申し上げると我々もこの場を立ち去るので、あなた方も兵を退いて立ち去って頂きたい」
「つまり、あなた方を見逃せと?!　失礼ながら一見したところ、我々が恐れるべき装備は何もお持ちでないように見受けられますが」
「こちらはそれで弱腰になるつもりはありませんよ」
「ほお……」
　お互いに弱気は見せられない。穏やかに心理戦と駆け引きが続く。
「こちらの申し出を聞いていただけない場合は、そちらのブリッジの横で待機しているザクが手持ちのマシンガンで至近距離からブリッジごと狙撃します」
「ほお……、それで我々より有利だと?!」
「違いますか?!」
　ザクから二人の会話を傍受していると少将は内心、冷や汗ものだろうなと想像がつく。
「我々のガンダムもソーテルヌ少将のブリッジをビームライフルで狙っていることをお忘れなく。その威力はご存じだと思いますが」
「存じ上げております。うんざりするほど」
「ならば、我々とあなた方の条件はイーブンだ」
「本当にそうでしょうか？」
　ニヤリと笑うソーテルヌ少将。何か策でもあるんだろうか？

「ブライト少尉、あなた方避難民を載せてますね?!」
「ど、どうしてそれを……?!」
　一瞬焦るブライト少尉。
「実は私たち、あなた方がサイド７から出港した後に、ヘマをやらかした部下の尻ぬぐいに
ちょっとサイド７に立ち寄ったんですよ。そうしたら地面を見ると大勢の住民の足跡が一斉に
宇宙港に向かって続いてるじゃないですか。これで私、ピンときました。あのあたりで大勢の
住民を載せて逃走できる大型艦はあなた方の木馬ーー、ホワイトベースしかないと。
あなた方は未だに避難民というハンデを載せて降ろせずにふらふらしてるんだって」
「くっ……」
「もうお気づきですね、ブライト少尉。我々をビームライフルで撃ち抜いてハーミットを
沈めるのは容易《たやす》いでしょう。ですがその報復として、そこにいるザクの手でホワイト
ベースのブリッジ周辺のブライト艦長を初めメインスタッフの方々には全員死んで頂きます。
その場合、残されたスタッフや避難民の方々はどうなるのでしょう？　あなた方は軍人です。
避難民をみすみす危うくするマネはできないはずです。私たちは無益な戦闘を好みません。
今一度撤収をご検討下さい」
　ソーテルヌ少将とブライト少尉はお互いの表情を探り合っていたが、
とうとうブライト少尉が折れた。
「うっ……、わかりました。ガンダムを引き揚げて立ち去りましょう。
ですがそちらもザクを引き揚げて立ち去って頂けますね?!」
「ジオン軍少将ハルカ・ソーテルヌの名においてお約束します」
「話は聞いたな、アムロ、戻れ！」
「ブライトさん、人の命を駆け引きに使うこういうやり方って僕は嫌いだな」
　ハーミットの迎撃を躱し、ガンダムはあと一息までハーミットを追い詰めながら
反転してホワイトベースに引き上げていった。
　やがて地球に進路を向けたホワイトベースは急速発進して立ち去った。
　僕が乗ったボロボロになったザクはハーミットの主砲の位置に
取り付けてある残骸回収用アンカーで回収してなんとか無事に戻ることができた。
「よしっ、ナガイは回収した！　ミラン操舵長、最大戦速でホワイトベースから離れろ!!」
「了解!!　全力で逃げます!!」
　ハーミットはホワイトベースの逆方向へ全力で逃走した。
　ホワイトベースの気が変わっても、もうハーミットには追いつけない。
　逆にホワイトベースの後を追う艦船が煙幕から出てきた。
　シャア少佐のムサイ　ファルメルだ。
　ソーテルヌ少将を見てファルメルの艦橋でニヤリと笑ったシャア少佐が敬礼する。
「あんにゃろ〜〜、高みの見物でお手並み拝見してたな！　助けに来い馬鹿ぁ〜〜っ!!」
　敬礼しつつ、あっかんべする少将。
　僕は笑いころげるシャア少佐というのを初めて見た。

　ハーミットの横をしばらく並行していたファルメルは急加速に入り、
本格的にホワイトベースの追撃を始めた。
「たく、あんなヤツがエースなんて世も末だわ……　あ、ナガイごくろうさん。
大変だったでしょ」
「ただいま帰還しました……。よく生きて帰ってこられたもんです。噂と違って、
木馬のクルー(乗組員)が戦争嫌いな若い連中で助かりました。
そうじゃなかったらハーミットを沈められて、帰るところが無くなってましたよ」
　少将とシャア少佐のやりとりを後ろで見ていた僕はそう応えた。
「そうね……、なんとか逃げ切れてホッとしたわ」
　非常事態が終了して、胸を撫で下ろす少将。
「有利な会談に持ち込んで切り抜けた少将の作戦勝ちです！」
　ミラン操舵長が健闘を称えた。
「ほんとヤバかった、冷や汗かきどおし。今回の作戦の本質はドラッグレースというより
どちらが退くかが勝負のチキンレースだったから」

　エレベーターのドアが開いて、格納庫に回収したザクの損害状況を
見に行っていたチェーンが戻ってきた。
「どうだった?!」
「ザクの楯に後付けしたガンダムシールドの内張りがベコボコ。
付けてなかったらナガイさん即死だった……」
「そうだったのか?!」
　冷や汗が出て寒気がした。
　うなづくチェーン。
「無茶な回避運動で駆動モーターに負担かけ過ぎ。
内も外もズタボロで部品取りにも使えない。
スクラップにして資源を再利用するのがエコ……」
　お手上げのポーズをとる。

「支給品破損報告書がいるわね、ハンコ押したげるから後で持ってきなさい」
「うえっ、僕の責任すか?!」
「あんたも私も同罪よ。後でドズル中将に代わりのザク補給してもらわないと
いけないから色々叱られるわよ」
「命懸けの酷い目に合わされて始末書ですか?!」
「命があっただけでも有り難いと思えってことよ」
「はいはいわかりましたよ」
「ん……」
　チェーンがオレンジ色のチューブを差し出した。
「なに？」
「敢闘賞。人参とみかんが入ってる。栄養がある……」
「頂こうか。今度のは人間の食いものっぽい」
　ちびっ子と二人で水色とオレンジ色のチューブをチューチューやってる絵はいかにも
アレな感じだ。
「ソーテルヌより全乗組員に通達。非常状況は終了、これより六時間の休憩を許可します。
各自交代のタイミングを考えて自由に休んで下さい。以上」
　艦内放送を帽子のマイクでした後、帽子を取って手でくるくる回す。
「あーーあ、疲れた。汗でびしょびしょ、指令控え室でシャワー浴びて仮眠をとるわ。
フルカワ少佐、後をよろしくお願いします」
「了解しました。ごゆっくりお休みなさい」
「僕もさすがに疲れました。艦長室にいますのでフルカワ少佐、ミラン操舵長、なにか
あったらご連絡下さい」
「了解しました、ナガイ中佐今日はお疲れ様でした」
「中佐お疲れ様でした!　チェーン今日はあなたもいい勉強したわね、
休憩だから寝てくる？」
「ううん、ミランお姉ちゃんの仕事が終わるまでここにいる……」
「そう、じゃあ、椅子に座って待ってなさい。今日はお姉ちゃんヘマやっちゃった。
潜宙戦煙幕の対処法、もう一度ネットでおさらいするからちょっと遅くなるけど
我慢してね」
「わかった。はい、これ……」
「チューブ食?!」
「うん……」
「なんかケバい水色だけど……、
　うっ、うわわっ、マズ!!　不味ぅ〜〜!!　なにこれ?!」
「残念賞……フフフ」

VOL1.5 第四話　サイド０（ゼロ）降下阻止命令**!**　につづく

第四話予告
ガルマ援護失敗による左遷から戦線復帰したシャアは、
ジャブローの偵察任務を終えてジオン本国との決戦に向かう
ホワイトベースを新鋭戦艦ザンジバルで追う。
一方、その頃ジオンのジャブロー降下作戦が一段落して
連邦軍の最新型主力モビルスーツ <ジム>による被害状況の
検地が終了にさしかかった回収分析班はいっときの休息を得る。
まどろみのソーテルヌが夢見た過去の戦いは、女性の身でありながら
短期間で少将まで昇進した理由となる壮絶なものだった。
それに加えてモビルスーツ ザク開発の裏側で暗躍する新興企業が
月に隠匿していた宇宙世紀を揺るがす発見がソーテルヌの回収分析班創設に拍車をかける!!
次回、「サイド０（ゼロ）降下阻止命令!!」
きみは回収の果てに何を見るか?!

機動戦士ガンダム サイド アナライズ ストーリー設定　覚え書き

機動戦士ガンダム サイド アナライズ ストーリー設定　覚え書き

宇宙天文学の知識

◎地表から100Kmの所から先を宇宙と呼ぶ

◎ソーテルヌ少将の名前のモデルになったソーテルヌとは

フランスのソーテルヌ地方で造られる貴腐ワインの格付けの総称。

　クセが無く酒嫌いな人でも飲みやすい、葡萄の香りが大変素晴らしい、

蜂蜜のような芳醇な甘口の高級な白ワイン。妙な酸っぱい酸味もない。

　酒嫌いな星野が唯一好きな酒。少し値ははるが買えない物ではない。

750ml 3000円から5000円前後くらいの物がおすすめ。

　若いものは少し黄色っぽい透明な色をしているが、年数が経ち熟成していくと

段々茶色味がかった琥珀色に近づいていき、味に深みが出る。

※アナライズストーリー内の特殊設定

◎基本的にアニメの設定に従うが、公認 後付設定と呼ばれるもので、

どうしても納得がいかないおかしなものは修正して定義しなおす。

　(たとえばガンダムなど格闘戦の衝撃やワッパなどの人間による襲撃に

不利なメンテナンスハッチが多すぎる。

　むしろその分、スラスターを増やし、メンテナンスが多少不自由でも

パーツの組み合わせをパズル式にするなどして 減らす傾向にするはず。

　また宇宙空間で動いて反動をつけて燃料を節約するとかシャアザクは三倍の速度などの

変な設定も納得のいく定義をする。(アンバック機動とかいうのは無効だろう。

燃料推進がなければ宇宙空間ではただもがくだけ))

　バリアフリーや手すりなど介護者に対する設備が、無重力で不自由になる宇宙では有効。

◎若い人間の昇進が比較的早い傾向にあるのは能力もさることながら、戦争で

多くの死傷者が出て、若い人間を優先的に戦場に送りこみたい事情があるため。

　特に宇宙では宇宙病や宇宙傷など地球では考えられないアクシデントが多発するため

隠れた犠牲者が多い。

　少将は士官学校出で、本来二万名以上の人員の指揮統率にあたる必要があるが、

ソーテルヌ少将の場合はサイド０事件の特例で特命付きの小部隊を率いることになった。

　ただし戦況の悪化により有能な人員が激減しているのに加え、一年戦争終盤では

ジオン公国を束ねていたザビ家の人員が次々と戦場で戦死していくため総崩れになり、

兵の無意味な戦死が激増したため必然的にソーテルヌ少将は十万人規模の指揮をする

戦闘に巻き込まれていく。

◎機動戦士ガンダムのお話後半で出るようなモビルスーツやモビルアーマーが、
シャアの大気圏突入エピソードごろに早くも登場しているのは、そのくらいの時期に
すでに先行開発されていて、ガンダムとの戦闘データにより、大幅な改良を加えている
最中という位の生産ペースにしないと一年戦争の短期間(約8ヶ月間)にあれだけの機体が
登場できるわけがないからです。
◎薄々読者の方々も気づかれているでしょうが、登場キャラ名は
ガンダム声優さんたちの名前がベースになってます。井上遥さんとか。(笑)

声のイメージその他メモ

声のイメージその他メモ

※ナレーション　　永井　一郎さん(笑)

※ハルカ･ソーテルヌ少将　(24)　　堀江　由衣さん

《決戦兵器開発部・回収分析班》総司令。日本人とフランス人のハーフ。

外見はブルネット(栗毛色)のロングヘアーに丸メガネがトレードマーク。

無線レシーバー付のギャリソンキャップを愛用している。(米海兵隊の将校がかぶるようなやつ)

　少し童顔の美人。胸が大きく、映画俳優並にスタイルがいい。

頭脳明晰、力持ちでスポーツ万能。おとなしくしていれば非の打ちどころのない

女性だが思ったことは言わないと気が済まない、じゃじゃ馬なのが玉にキズ。

恋愛感情が薄く、なぜか女性と小さい女の子には甘いので一部の部下からレズ疑惑がある。

　ヒロタカという弟がいて、立場上素っ気なくしているが実は姉バカである。

　二十四歳の若さで少将という、ジオンの支配者一族であるザビ家の者以外で

例外的に少将の地位にまで昇り詰めることができたただ一人の女性。

　コンスコン少将の遠い姪に当たるらしい。

　そのやんちゃな性格さえなければ喜んで配下に迎え入れたいとギレン大将（総帥）に言わしめた。

　シャアの実力は認めているが、素顔も晒せないヤツは信用も信頼もしない、

いけ好かないヤツだと公言している。

　現在は部下の採用には比較的寛容で面白みのある者を好むドズル・ザビ中将の配下にいる。

　天才的軍事の才能と、輝かしい戦歴を積み重ねており部下思いの優しい性格のため、

部下の信頼も厚く、乱暴だがタメ口を許すフレンドリーさで人気もある。

　戦術は基本的に少数の相手を物量で叩きつぶす古典的な戦術を好み、

ジオンきっての戦争の達人と呼ばれるほど天才的指揮能力を持つが、

回収分析班という大ハンデをあえて自分から背負っているため、

最悪の戦況に追い込まれることが多く、最小限の被害で負けない戦いに徹する日々が続く。

　過去にある作戦の功績で少将に昇進するが、それ以来罪の十字架を背負い、回収分析班を開設する。

(その作戦の時は中佐で一時グワジンの艦長をしていた。)

　またその頃に《ファウンデーションガンダム》と遭遇して、群を抜くモビルスーツの知識と経験を得た。

　優秀なだけにジオンの敗戦を開戦時から読んでいて、少将という立場もあり、

終戦後におそらく自分は生きていないだろうと諦観しているところがある。

　モビルスーツ開発でも天才的手腕を持っており自らモビルスーツの操縦をこなす。

　愛機は特になく、その時々に使用可能な機体に乗る。

※イチロー・ナガイ中佐　(26)　神谷 浩史さん

　ソーテルヌ少将の有能な参謀。若く悪くない容貌をした日本人の青年。

つきあいが一番長く、お互いに言いたいことを言いあう間柄。

沈着冷静、客観的で指摘や指示に定評がある。

　世話好きで普段は冷静沈着だが、おとなしそうな外見とは裏腹に、
根はヒロタカ・ソーテルヌを上回る熱血野郎。
　ソーテルヌほど突出していないが、若い兵士が減ってきて昇進が早い
傾向があるとはいえ26歳で中佐であるその実力は相当なもの。
　昔、コンスコン艦隊に所属していて、そのころからソーテルヌ少将とは
顔見知りで尊敬していた。
　本来なら中佐なので一部隊を背負えるがソーテルヌ少将に心酔し、
あくまで参謀に徹してきた。
　旗艦《ハーミット》一番艦艦長を務める。
モビルスーツの操縦はソーテルヌ少将に次ぐ実力がある。
愛機は回収分析班専用ザク。
　サイド アナライズ ストーリーは大抵この人の語りでお話が進められる。
※トシオ・フルカワ少佐　(62)　　多田野　曜平さん
　白髪、白ひげが似合うクリントイーストウッドに似たベテランの老軍人で
ソーテルヌやナガイが判断に迷ったときなどのご意見番、後見人的存在。
　ソーテルヌやナガイの優秀さにほとんど言うことがないので、手落ちな部分を黙って
フォローしたりして控えているが、後半、戦況が激戦で混沌としてくるとその真価を発揮する。
　ソーテルヌやナガイが赴任する前まで回収分析班の総司令をしていた。
※ミラン・アギ少尉 操舵長　(19)　長沢　美樹さん
　ウェーブのかかった青いロングヘアーが印象的な童顔の女性でチェーン・アギを姪に持つ。
　他人に対してはおだやかで面倒見が良く、おせっかい気味だが、
自分は引っ込み思案なところがある。
　《ハーミット》一番艦の操舵長を務める。
　弱冠19歳の女性が操舵長というのはジオン軍全体で見ても珍しい。
　艦船操縦に関しては優秀な人材として知られていたが、なにぶん若い女性と
いうことで前線の部隊では年配の男性操舵長の補佐としてたらい回しに
されていたところをズバ抜けた才能に惚れ込んだソーテルヌ少将にスカウトされた。
　抜群の反射神経と動体視力をもつが、運動神経は並で走るのが苦手。
※トール・フルヤ伍長　(19)　櫻井 孝宏さん
　ナガイ中佐の部下。
戦闘経験はあまりなく、もっぱら検地分析専門のエキスパート。
レーダー監視員(重労働のため五時間交代制)兼任。
愛機は回収分析班専用ザクだがあまり使う機会はない。

※チェーン・アギ　(7)　弥生 みつきさん

　後に逆襲のシャアで、アムロと恋仲になり共にロンドベル隊に渡り、νガンダムの開発をする優秀な女性。

　このストーリーでは7歳で神童と呼ばれるほど幼い頃から天才的開発能力を発揮する。

　朴訥で人見知りが激しいおとなしい性格だが、大人ばかりの回収分析班の隊員達の中でただ一人の子供のため、みんなから可愛がられているマスコット的存在。

　一応国籍は地球連邦だが、何かとアナハイムに関わることの多い人生のため、立場的にはいつもグレーゾーンにいる。

※アナハイムグループ総帥　キルヒ･レィツ　(30代前半)　櫻井 孝宏さん

　ドイツ人とアメリカ人のハーフで　眼鏡をかけた中背の調子のいい男。陽気でおちゃらかでボンクラっぽい外見を持ち、馴れ馴れしい性格だが、かなりのキレ者。

　アナハイム･エレクトロニクスを初めとする新興企業グループ、アナハイムグループの総帥を務める。

　モビルスーツ開発など軍事関連もアナハイムで独占的に支配する野望を持ち、それを堂々と人前で隠さず口外する有言実行主義。

　天才的な手腕を持つ商売の才能以外にも、先進的なモビルスーツ設計の才能など、見た目と反比例する秘めた実力を併せ持つ。

　ただし、地球連邦やジオンといった垣根はまるで眼中になく、連邦やジオンの政治関連を利用して人類の支配を企てるといった、欲からくる大きな野心はない。

　また、運動能力や戦闘能力が特に優れているわけでなく、モビルスーツの操縦もテスト運転が無難にこなせる程度。

　過去に多くの謎を持ち、《ファウンデーション ガンダム》をモビルスーツ関係各社と共に暗黙の了解で隠匿していて、実は過去の作戦でマスクを被り、ソーテルヌ少将と出会った経験がある。その時からなのか不明だが、ソーテルヌ少将のファンらしい。

※ヒロタカ･ソーテルヌ少尉　当時(18)　櫻井 孝宏さん

　ハルカ･ソーテルヌ少将の弟。日本人とフランス人のハーフで階級は少尉。

　幼い頃に軍人だった両親と死に別れ、姉と共に暮らしてきた。

　モビルスーツのパイロットが本職。単独行動で短時間で成果を上げるのが好み。

　姉からさんざん馬鹿馬鹿言われるハイテンションのお調子者だが、実は頭もいい。

口が悪くて言い出したら聞かない命知らずの無鉄砲。

　運動神経は姉以上でケンカも強い。

　追い込まれるとナガイとは逆に冷静沈着になるタイプ。

　女性に優しくもてるが、手も早くセクハラ好きなので潔癖症の女性からは毛嫌いされる。

　致命的な味覚音痴。姉思いなので、本当は味などよくわからないが姉の作った

料理だけは文句を言わずに食べる。

　腕が良すぎてモビルスーツの性能を限界まで引き出しすぎ、低性能の機体は

すぐおしゃかにしてしまうモビルクラッシャーの異名がある。

※シオザワ技術士官　(38)　神谷　浩史さん

　幅広い分野に精通した優秀な技術士官。メカや設備の勘所を一目で見抜く才能を持ち、

過去の歴史にも詳しい。

　ソーテルヌ少将がグワジンに乗っていた頃に目をつけられ回収分析班にスカウトされた。

　穏やかなおじさんで頼りがいがあるため、各部署にひっぱりだこで忙しい。

ガンダム正史上の人物　《ジオン軍》　1

【ガンダム正史上の人物】

《ジオン軍》

※シャア・アズナブル大佐 (20)

　ある意味、アムロより有名な赤い彗星。

モビルスーツの伝説的な使い手として連邦軍、ジオン軍共通の超有名人。

知力・体力、逃げ足の速さ、悪運の強さ、狡猾さ、カリスマ性等どれをとっても超一流。

相性の悪い天敵はアムロのみ。

　ソーテルヌ少将に人前でマスクをつける趣味を毛嫌いされており、色々難癖を

つけられるが、いつも一枚上手でからかっている。

　ジオン・ダイクンの息子で最初ザビ家抹殺を目論んでいたが、人の愚かさに

触れていくうちにもっと大きな理想を追い求めるようになり、後に様々な

反抗組織を渡り歩き、ついにアクシズでネオジオンの総帥として立脚、危険思想に

走るようになる。出世を極め、ソーテルヌ少将を追い越す伝説の大物になってしまうが、

そこまで有名になっても赤色が好きな趣味だけはやめられないらしい(笑)

※コンスコン少将

　ジオン軍で重巡洋艦チベの優秀な使い手として知れ渡ったお人で、

ソーテルヌ少将の遠縁の伯父らしい。ソーテルヌ少将が士官学校時代に、

艦隊戦の教官として一時期指導を受けたことがあり、ソーテルヌ少将の《物量主義》は

この人の影響が少しあるようだ。(この人の家系はシャアが天敵らしい(笑))

　ナガイは昔コンスコン艦隊に所属して経験を積んでいた。

　後にニュータイプに目覚め始めたアムロの乗るガンダムの強さを敵味方に知らしめるだけの

噛ませ犬を演じて死亡するハメになる悲劇の人。

※ドズル・ザビ中将

　本来ならザビ家のボンボンでいられる立場を良しとせず、ひたすら

戦士の道を一直線に鍛え上げ、モビルスーツの創世記に関わり、

士官学校の校長までしていた闘争至上主義者。

　二メートルを超す鍛え抜かれた巨体にフランケンシュタインの怪物似の傷だらけの男。

　敵味方ともによく恐れられるが、実は子煩悩の愛妻家で大変な部下思いの善人。

弟のガルマ・ザビもよく可愛がっていた。

　数とパワーがモットーで、シャアとソーテルヌ少将の良き(？)上司。

明らかにギレンやキシリアのような戦略・謀略を駆使する知能派ではないので、

そちら方面はシャアやソーテルヌ達に任せることが多い。

　一年戦争終盤、宇宙要塞ソロモンでビグザムに搭乗、ガンダムと交戦し戦死する。

ガンダム正史上の人物　《ジオン軍》　2

　後にソロモンから自分の命を楯にして逃がした愛娘が、正統なザビ家を継ぐ者として
新たな戦争の火種になり、ハマン・カーンやらユニコーン・ガンダムやら、とんでもない
大騒動を巻き起こしていく。
※ギレン・ザビ大将
　ザビ家の長男でＩＱ２４０の知能指数を誇るジオン公国の実質的な支配者。
地球連邦軍を打破して、全ての人間の中から自分たちに選ばれた優秀な人間のみが
支配し、劣る人間は全て排除した世界を目指す危険な選民思想の持ち主。
〈ジオン国民以外は全て下等人民〉というスローガンのもとに圧倒的な支持を得て、
ヒットラー並のカリスマを誇る。
　後に戦争のどさくさで隙をつかれ、父殺しの大義名分を掲げたキシリア・ザビの
手により殺される。
※キシリア・ザビ少将
　手強い兄弟達など邪魔者達の情勢を見極めながら虎視眈々とジオン公国の
独裁を狙う優秀で狡猾な女性。
　ドズル・ザビ中将が宇宙要塞ソロモンでガンダムと交戦して戦死した為、
拠り所がなくなったソーテルヌ少将率いる回収分析班を武装化させ、
連邦軍の最前線にぶつける。
　戦況の悪化により、新モビルスーツの開発をしている余裕がなく、
回収分析班が不要になり、有能な将官と戦力が必要だからというのが
たてまえだが、自分のジオン公国独裁の野望にソーテルヌ少将が
邪魔になるので《名誉の戦死》をさせようというのが本音。
　ギレン・ザビと並び真の悪人。後にシャアにバズーカで殺される。
※ガルマ・ザビ大佐
　ザビ家四人兄弟の末っ子でデギン公王やドズル中将に、自分達やジオン公国を
善い方向へ導いてくれると溺愛されていた期待の息子。
　シャアの親友?(笑)。ボンボンで根はいいヤツだったがシャアに図られて死亡。
死んでもタダでは起きない人で(起きたらゾンビ(笑))、自分の死によって猫可愛がり
していた兄のドズル・ザビを激怒させ、あのシャア少佐を左遷(クビね(笑))に追い込む。
※デギン・ザビ公王
　地球連邦の横暴・冷遇に対し、地球から最も遠く離れた月の裏側の
スペースコロニー〈サイド３〉の民衆と共に、立ち上がったジオン公国の創始者
ジオン・ダイクンの有能な元側近。
　ダイクンの死後、ザビ家の独裁という形でジオン公国を牛耳る。手を汚し、
手荒いながらも自分流のやり方でジオン・ダイクンの理想と遺志を継ごうと
していた実は善人。

ガンダム正史上の人物　《ジオン軍》　3

　しかし、ジオン公国の実権を握った時にはすでに年老いていたため、若かりし頃の
覇気が無く、三人の息子と一人の娘たちに政権を譲る。
　溺愛していた息子のガルマ・ザビの死によって失意のどん底に落ち、一年戦争終盤には
彼らのすることをただ承認するだけの立場になっていた。
　地球にコロニー落としをして戦争の早期決着を図るため実行許可し、地球連邦まで
支配しようとしたのはやり過ぎだったが、基本的にジオン国民の真の独立と元は同一で、
地球の人間達の幸せを願っていた点で息子のギレン・ザビとは決定的に思想が
食い違い、よく対立していた。
　実質的にはギレン・ザビが支配するジオン公国の現状を見て、早い段階で
ソーテルヌ少将同様にジオンの敗北を予感し、できる限りジオンに良い条件で地球連邦軍と
和平交渉をしようとしたところをギレン・ザビの策略により謀殺される。
　とんがった禿頭でドズル・ザビ似の悪人面をしているため悪人と思われているが、
サイド アナライズストーリーで、真の悪人として語られていくのは危険思想に傾いていく
ギレン・キシリア・シャアの御三家。

ガンダム正史上の人物　《地球連邦軍》

《地球連邦軍》
※ブライト・ノア (19)
　機動戦士ガンダムの名脇役。
　なんだかんだとトラブル続きの木馬(ホワイトベース)をどうにか運用している名艦長。
　ソーテルヌ少将がシャアにコバンザメのようにくっついているため、
一年戦争中に何回か出くわすことになるが大抵圧倒的有利な条件にも関わらず、
実直でくそ真面目な責任感の固まりみたいな性格のため、そこをうまくソーテルヌ少将に
突かれて取り逃がしている。
　ソーテルヌ少将を討ち取れなかった小さなミスはやがて、大局的にア・バオア・クーにて、
ホワイトベース沈没に繋がっていくことになる。
※アムロ・レイ (15)
　『アムロ行きまーす!!』で有名なご存知、機動戦士ガンダムの主人公。
後にチェーン・アギと恋仲になる。
　シャアとは何かと腐れ縁で、何かと思想が対立するどこまでいっても
白と赤の交わらない関係。
　サイド アナライズ ストーリーはガンダムと銘打たれているのにアムロの出番が少ない。
にも関わらず、たまに登場すると光るのはさすが本主人公(笑)

機動戦士ガンダムサイド アナライズ ストーリー VOL1

http://p.booklog.jp/book/17357

著者 : 星野幸介　制作 : リスキーナ
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/rishosipab/profile

発行所 : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/17357

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/17357